

この世のものとは思われない重慶大爆撃の惨状 —忘れられない5月3日の記憶—

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告

鞠天福

1 私は鞠天福と申します。抗日戦争期に起きた重慶大爆撃の被害者であり、生存者であり、生き証人です。私は、1932年7月3日、重慶市南紀門韓府三堂にあった比較的裕福な家庭に生まれました。今年で75歳になります。育ったのも重慶市渝中区です。

2 私が2歳の頃、家族は重慶市内の商業場という所に引っ越しました。

その場所で祖父は「炳森堂」という名前の工芸品店を開きました。その店には専門の工芸工房があり、各種工芸品を製作していました。

また店は、書画・骨董の買い取りや販売、また筆、墨、紙、硯の販売などをやっていました。

祖父の鞠國楨（1871年生）と伯父の鞠正青（1889年生）は、当地の有名な工芸職人でした。伯父の養子・鞠天生（1922年生）も祖父と伯父と一緒に働いていました。

当時は店の経営は順調で、父は近所の西四街の寰球映画館に出資し、またその映画館でも働いていました。父が毎月得ていた収入はかなりの額で、家族の生活は豊かで、一家は穏やかに暮らしていました。

3 1938年、日本軍機が重慶広陽坝飛行場を爆撃しました。その後日本軍機はしばしば重慶市に飛来するようになりましたので、重慶市民はいっぺんに恐怖状態に陥り、次第に店の経営も不振になりました。

すでに1938年から、重慶市街地に住む住民は地方に疎開を始めました。私たちの家族でも、祖母と母と3歳の弟は、爆撃を避けるために、商業場の店舗兼自宅から直線距離で2、3キロメートル離れた、揚子江対岸の南岸区玄壇廟玉享井の住宅を買い、そこにしばらく住むことにしました。私は玄壇廟小学校に入学をしました。

しかし祖父の鞠國楨、伯父の鞠正青、いとこの鞠天生はお店を守るために残りました。また父の鞠正文も映画館で働いていたので、そこを離れることは出来ませんでした。職人と雇い人は帰郷費を払って故郷に帰りました。

それでも最初のころは、日本軍機が空に現れても、人々はあまり気にしませんでした。日本軍機は偵察するだけで、爆弾を投下しないこともあったので、人々はまったくそのことを気にかけなかったのです。豪胆な人は、隠れもせず日本軍機の数数を数えたりしていました。

しかし国民政府が1938年に重慶を臨時首都に定めて以降、日本は重慶爆撃計画を確定したので、重慶市に対する爆撃はしだいに激しくなってきました。

4、1939年5月3日、突然大きな災難がやってきました。巨大な衝撃を受け、私に一生消すことのできない災難の記憶を残しました。3日の昼ごろ、私は通学鞆を持って家を出ていくらもいかないうちに、警報が鳴り響きました。急いで家にとって返すと、家族はまだお昼ご飯を食べているところで、お椀とお箸をおき、いつものように包みをもって、いっしょに家の裏の山の中腹にある。深さ1メートルほどしかない石崖の中にみんなが入り込みました。

揚子江の対岸の美豊銀行の上に掲げられた赤い提灯、これは空襲警報を重慶市民に知らせるものなのですが、それがすでに下がっていたので、敵の飛行機がもうすぐ重慶の上空に入ってくるのだということがわかりました。

日本軍機のウオーン、ウオーンという音が近づき、愕きました。というのも、日本軍機が、黒いカラスが群れをなして集まったように大空を覆っていたからです。日本軍機は次々と入れ替わって酷い無差別爆撃を繰り返しました。

日本軍が投下した爆弾の巨大な轟音が鳴り響いた後は、すぐに静かになりました。敵の飛行機は一回もう一回飛んできて無差別な攻撃を行いました。私たちは恐ろしくて、目を見張り、口を開けたまま茫然としていました。絶えることなく閃光とともに対岸の爆発音が響いてきました。3歳の弟はその音に驚いて激しく泣きじゃくりました。母親は弟の泣き声と爆発音にたまらなくなり、弟を叱りつけ、手で弟の口を押さえつけました。祖母はそうした母を戒めました。要するに家族全員が不安にさいなまれていました。太陽や空を覆うほどの火炎や濃い煙が全重慶の町を包み込んでいたのです。まるで町全体が爆撃され、燃えているようでした。私たちの町、私たちの家、私たちの友人、すべてなくなってしまうしました。これまでこのように強烈な衝撃を受けたことはなく、極度の恐怖のために私たちは全身が震え、顔が真っ青になっていました。

- 5、私は日本の裁判を支援してくれている市民グループの人に頼んで、当時の日本の新聞を見せてもらいました。「東京朝日新聞」昭和14年（1939年）5月4日の報道は、「日本空軍は3日午後重慶に対し空襲を行い、揚子江北岸の重慶市中心部などに猛烈な爆撃をおこなった、爆撃により多くの地域が火事になり、損失は甚大」と書いて重慶市街地に対する無差別爆撃を認めています。揚子江北岸重慶市中心部というのは家のあった商業場、西四街あたりでした。5月3日という日は日本軍機が重慶に対し爆撃を開始して以来最も激しい爆撃でした。中国の歴史資料は当時の状況を「19の街が廃墟になり、41の街が火の海となって燃えた」、「にぎやかな商業場一帯はほぼ

全部破壊された」、「西四街などの地域被爆」と記録しています。

6、3日は、警報がなかなか解除されませんでした。翌日5月4日には、再び日本軍は重慶市に対して無差別爆撃を敢行しました。私の家の稼ぎ手や家屋財産はすべて、日本軍が休むことなく連続して爆撃している重慶市内にありました。川を渡ってしばしば安否を知らせてくれたいた従兄も、3日以降数日連絡が途絶えたままでした。家族みんな心配でご飯も喉に通らず、眠りにもつけない状態でした。祖母は毎日目を閉じたまま数珠を手にして、ただただ「生きてさえいれば、家、財産は取り戻せる。生きてさえいれば……」と言葉を繰り返すのみでした。私たち家族は家の中で幾日も一言も口を開きませんでした。

7、4、5日ぐらいたってから、髪をぼさぼさにし、顔が汚れきった父がようやく南岸の家に戻ってきました。父は私たちに、「映画館は爆撃され、私たちの店と家もきれいに吹き飛んでしまった」と告げました。日本軍が連続して爆撃をしていたことと、また爆撃された現場が軍警の防護団によって封鎖されてしまい、店の中に入ることができなかったので、父は数日たたないと南岸の家に戻ってこれなかったのです。

封鎖されていた地域に入ることができた人の話では、中は整理中で、出てきた貴重品などは一カ所に集められ、焼き焦げ縮かんだ死体や千切れた四肢などは、大きな籠に入れて2人でかつぎあげ、大きなマスクをつけて、何籠も何籠もいっしょに積み上げており、惨たらしくて見るに忍びないありさまだったとのことでした。

封鎖が解かれた後で、父が店舗に行った時、そこには砕けた瓦礫と汚水が残っているだけだったそうです。祖父、伯父、従兄3人は行方が知れず、あちこち尋ね回りましたが、死体も解りませんでした。千切れた四肢だけでは

どれが本人かの確認もできなかったのです。父は当時、後伺坡洞の中に逃げ込んで、ようやく難を逃れることが出来たそうです。祖母と伯母はこれを聞いてショックのあまり倒れてしまいました。最後まで3人の遺体は収容できないままでした。

こうした結末は私たち中国人にとって人生で最も悲惨で耐えられないものです。

8、翌日朝、私は空がようやく明るくなり始めた頃、伯母について、わずかな期待を抱きながら小船に乗って、家族を探しに行きました。

そこはまさしく父が言ったように、一面は焦土と化し、崩れた家ばかりで見渡す限り破壊され、途上には未だ収容されていない遺体があちこちばらばらに散らばっていました。

伯母は目をこらして見ていましたが、電線や木の枝に引っかかっている人間の腸や手首や足首、服の端切ればかりでした。

あたりは汚水が溢れ、生ぐさい死体臭が充満していたので、吐き気を催さずにはられませんでした。街を通り行く人々は鼻を掩い、すすりなく声や怒鳴り声、父が娘を捜し求める声が鳴り響いていました。

伯母は絶望して、「天福や、死んでしまいたいよ。」と頭を崩れかけた壁にぶつけようとしてしました。私は必死になって引き留め、「伯母さん、はやく南岸にもどろうよ」と言いました。このすさまじく悲惨な光景は、私の脳裏に強く焼き付けられ、生涯忘れることが出来ません。

おそらく3人の家族の遺体は、引き取り手がないか、身元が不明な死者とともに、郊外に運ばれ、万人坑に集団埋葬されてしまったのだと思われます。

当時埋葬にかかわった人で、現在90歳の劉吉祥老人の話によると、「5・3、5・4と大隧道惨案以降、死体は何百何千と運ばれてきて、川岸に高々と積み上げられ、犬の群が駆け寄って噛みちぎり、腸がいたるところに引

き出されていた。」気温が高いため、遺体の腐爛が早く、遺体を運ぶもののなかには、溝のなかに入れ、上に土をかぶせておいた場合もあり、一雨くると、その遺体が露出し、さらに犬が噛みついて食べ、とても悲惨だった…」ということです。

- 9、日本軍は5月3日と4日、重慶に対し爆撃を行いました。これはいずれも計画的なものでした。そのターゲットは人口が密集している市の中心部でした。ここには、軍事施設も軍需工場なども一切なく、一般住民が住む家や学校、商店があるのみでした。

日本軍は一般住民の大殺戮と破壊を意図し、最先端の爆撃弾、凝固ガソリン弾と機関銃を用いて、手に寸鉄も帯びてない無辜の大衆を殺傷し、大衆の財産を破壊つくしたのです。

5・3、5・4の2日にわたる大爆撃は、3991人の爆死者、2323人の負傷者を出し、4761室の家屋を破壊しました。

世界中のどこにも5年間半の長きにわたって、爆撃を受けた都市は重慶市以外にはありません。少なくとも二百回以上、あるいは三百回をこえる爆撃を受けた都市も重慶以外にはありません。

重慶では5、60万人の人が家や財産を奪われ、帰る場所を失い、死傷者は5万人を超えました。被害財産総額は数え切れません。美しく繁華な町は一瞬のうちに恐ろしい地獄に変わったのです。

- 10、5年半にもわたる長い期間、私は長江（揚子江）南岸で重慶でなされた大空爆と大殺戮の残虐さを目撃し、一般大衆に降りかかった酷い災難を体験しました。

私の家だけを例にとっても、財産の損失と3代にもわたる親族が死亡し、裕福で衣食に困らな富裕な家でしたが、わずかの間にすべてを失い、何の助

けもえられない悲惨な状況に陥りました。

公定価格の米を買うために、家のもので質入れできるものはみな質入れし、売れるものはみな売りました。食事の足しになればと、野菜市場に行って落ちている野菜くずを拾いました。食糧が切れた時は腐った豆腐かすを食べ、飢えをしのぎました。

祖母と母は心労のため病を患い、お金がなかったので治療も施すことが出来ないまま死んでいきました。

私は今でも重病となった母を、カナダ人の梁正倫が開いた仁済医院に運び、治療を請い願った事を忘れることが出来ません。仁済医院は全くもって「仁済」などではなく、入院するのに毎日銀貨二枚、ペニシリン注射一本にも銀貨二枚もの大金が必要だったのです。日々の公定価格米すら買うことかできないのに、どこからそんな銀を手に入れられるでしょうか。やっとの思いで担いでいったのに担いでもどらねばなりませんでした。

母の深くへこんだ両目から涙がこぼれ、絶望が漂っていました。家族は全くなすすべがありませんでした。そして3人の弟や妹も次々と夭折しました。

爆撃を避けるために、南岸に買った家も、一室一室と売り払い、我々家族は最後は一部屋にぎっしりとなって生活しました。抗日戦争が勝利するまでずっと、市内のもとの場所にあらためて家をたてなおすことができなかったのです。

私の妻趙風娣は、1935年7月3日北京市海淀区に生まれました。1937年の盧溝橋事件時、父母や叔父は亡国奴になることを望まず、家業を捨て年輩者たちと別れました。彼らは、10歳に満たない4人の兄弟姉妹を抱え、日本軍の銃撃を受ける危険を冒して逃げてきました。苦難を嘗め尽くし、長く苦しい旅をし、叔父は戦火の中死亡しました。

最後には重慶まで逃げ、重慶大爆撃の苦しみも経験しました。彼女の故郷が陥落した後、財産をすべて失い、親族との音信は全く途絶えてしまったの

です。

これが私たち一家の経歴です。日本軍が中国に侵略したときに起こした悲惨な現実です。

私は子孫に重慶大爆撃のことを語り続け、記憶を永遠に引き継がせます。私たちの家は大きく傾き、人々は死にました。毎年5月3日は私の家の忌日となっています。毎年この日が近づくと、私たちは簡素な服を着、粗末な食事をして、紙のお金を燃やして先祖を供養します。爆死した祖父や、治療を受けることが出来ずに死んでいった母たちを偲ぶのです。

私は今でも、火災の火を見たり、消防車が鳴り響く音を聞くと、体が硬直したり、何も考えられなくなります。頭のなかに、爆撃と燃え上がる炎、そして家族がもがきくるしむ悲惨な光景が浮かびあがり、なかなか心が平静にもどらないのです。

- 1 1、日本と中国は、長期にわたり、ひとびとは友好的に往来し、文化、物資の相互交流がされてきました。しかし当時、権力を掌握した日本の軍国主義者たちは、天下の大悪をあえて犯し、侵略の手を広げていきました。日本軍は中国を何度も侵略し、中華民族の抗日意志を挫くために、強大な空軍力を用い、無防備の重慶市という都市、非武装の無辜の人民に対して、5年半の長きにわたって血生臭い爆撃をしました。

こうした死傷や財産の損失は、私たち重慶大爆撃の被害者の精神に終生消えることのない損傷をもたらしたのです。

- 1 2、戦争は中国や重慶市民に多大な苦難をもたらしただけではなく、日本人に対しても大きな被害をもたらしました。重慶大爆撃や東京大空襲、広島、長崎の原爆投下による惨劇は二度と繰り返してはなりません。

日中両国の人民は手を取りあって、戦争に反対し、私たちは一衣帯水の隣

国日本と子孫の代に至るまで友好関係を保っていくことを、心から願っております。我々は平和を愛し、世界の平和を希求します。戦争をこの世から無くしていかなければなりません。

また、当時に日本の軍国主義者たちが起こした中国に対する侵略、重慶無差別大爆撃などの不道理を明らかにしなければなりません。

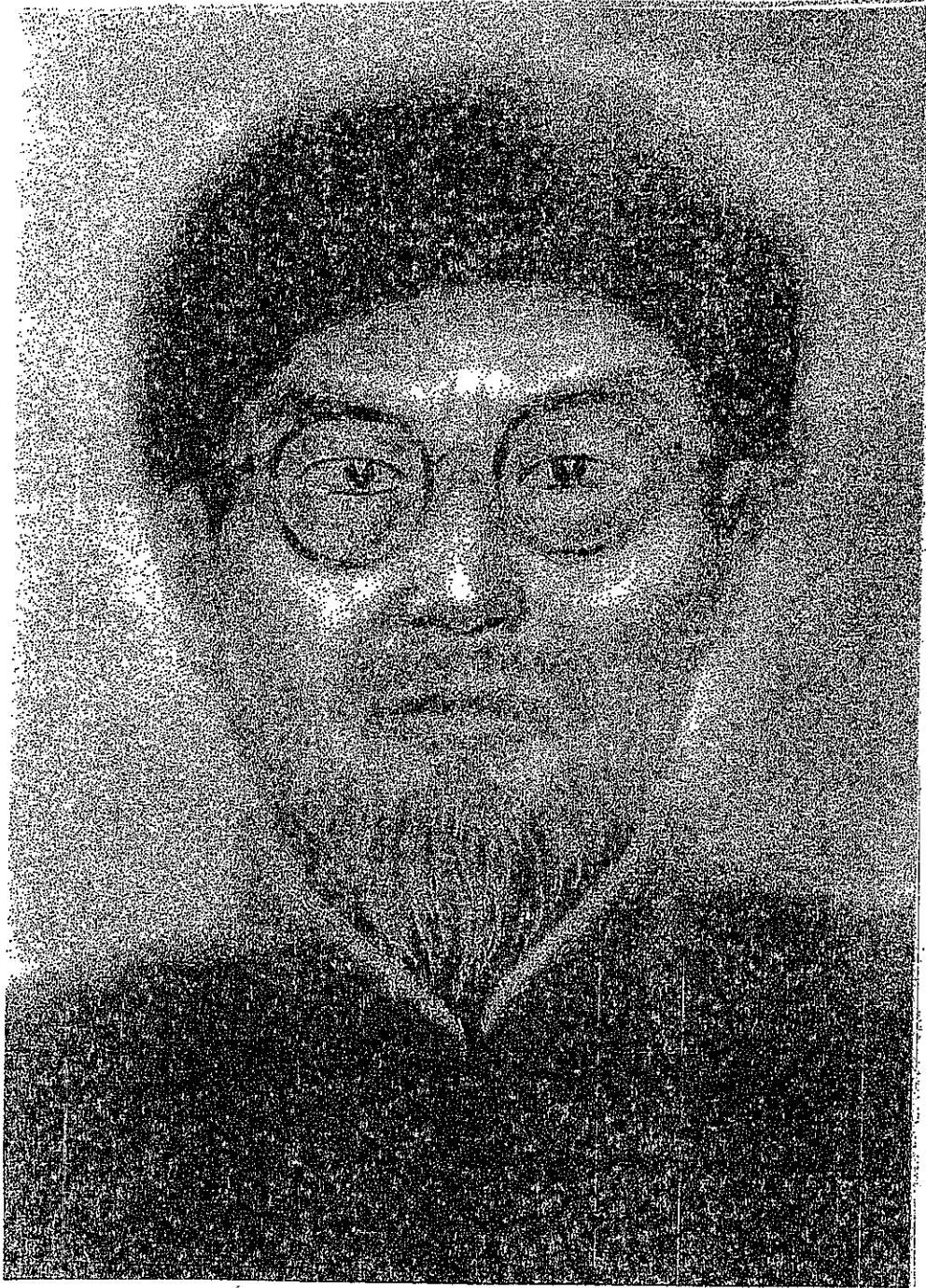
決して許すことの出来ない戦争の罪を犯したことについて、私たちは日本政府に対して、重慶大爆撃の被害者たちに謝罪と賠償をすることを要求します。これは天の道理にのっとった正当な要求です。

我々は良心良識を持った日本の方々が、支持と理解をしていただいていることに心から感謝いたします。

以 上

原告鞠天福が中国語で記載したものを忠実に日本語に翻訳しました。

2008年3月26日



祖父

鞠国桢(鞠炳森)

1871年12月13生まれ。1939年5月3日爆撃
当時住宅兼店でもあった自宅で被爆死亡。被爆当時 68
歳。



伯父

鞠正青（鞠南亭）

1889年5月8日生まれ。

1939年5月3日爆撃当時住宅兼店でもあった自宅で被爆死亡。

被爆当時49歳。



従兄弟

鞠天生

1922年1月20生まれ。

1939年5月3日住宅兼店でもあった自宅で被爆死亡。

被爆当時17歳。

火は3日燃え続けました。

被爆地域の人々は火から逃げられず生きたまま火に焼かれて死んだり、瓦礫の下敷きになって死にました。死体は一箇所に積み上げられました。積み上げた死体は全部黒く焼焦げていて親族が引き取ることのできない状態でした。

大爆撃後の我が家の境遇は見る影もなかった



上の写真は私が三歳の時、祖母と両親とともに撮った家族写真です（1935年）。その当時生活は裕福でした。ほかの三枚の写真は被爆後撮影された写真です。当時生活は凄く大変でした。次頁の被爆後の写真と大きな差があります。



父：鞠正文（鞠西坪）

映画館から伺後坡崖洞に避難してまもなく映画館は爆撃されました。彼は数日後飢え切ってぼろぼろな状態で南岸の臨時居住地に戻って来ました。それから病に倒れました。精神的にも魂が抜けたようになり体も弱り、仕事もできなくなりました。



祖母：鞠陳仁道

母：陳文欽（鞠陳氏）

被爆前には穏やかな生活をすごしていました。爆撃後は他人の為に衣服を洗濯したり靴を作ったり服を編んだりするなど一日中一家の生活の為に働きばなしで病気になりましたがお金が無く治療を受けることもできませんでした。当時二人は病院に運ばれましたがお金が無かったためそのまま戻るしかありませんでした。その時の家族の絶望感はいまだに記憶に残っています。

二人は1945年上半期に病気で他界しました。祖母は当時69歳、母当時わずか31歳でした。



▲ 当時の埋尸人、86歳の黄樹云

身元不明遺体を万人坑に埋葬（死体を埋蔵した人の陳述）

遺体の中には私の親族も三人います。

死体は白沙沱沙坝に埋めました。死体は河の水に流され無くなって行きました。爆撃被害者は可哀そうです。

劉吉祥（黒石子村村民）

“重慶大爆撃”が始まった当時、私は10歳ぐらいでした。たくさんの死体が黒石子村に運ばれて来ました。寸滩、黒石子、朝陽河の船は朝天門に移されて死体運びに使われました。死体は黄桷渡码头まで運ばれました。その後私たちの地域と大石坝地域に運ばれ埋められました。五・三、五・四の大爆撃と大隧道惨案後、数百千人の死体が運ばれてきました。

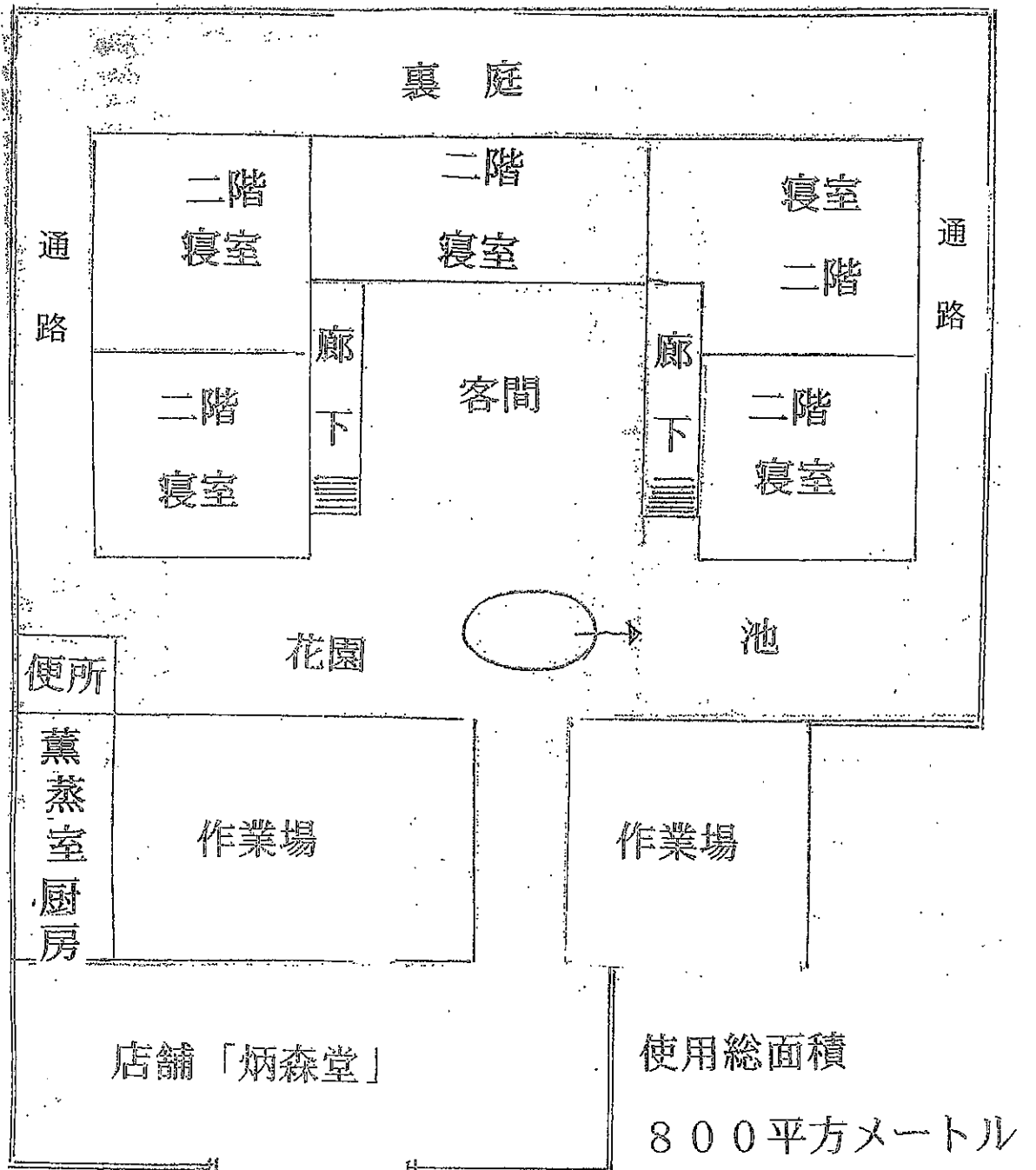
死体は川沿いに高く積んでありました。何匹かの犬が走ってきて肢体を食いちぎり腸などがあちこちに散乱していました。当時、路を通る人まで死体運びに動員されました。

それでも人手が足りなかったです。気温が高く死体はすぐ変わり果てました。死体を運んでいた人々は死体を溝に入れて死体の上に土をまきました。雨が降って土が流され死体は再び路面に出てきました。それを犬がまた食いちぎる悲惨な光景でした。

当時私たちが死体を埋めた地域は重慶桐君閣製薬工場の社長が所有していた土地でした。

社長は死体を埋めるよう土地を提供しました。今もはっきり覚えています、大きな穴四個を掘って穴一個に数十人ずつ埋めました。四個の穴のうち一箇所は家からあまり離れていない場所でした。聂美德さんの家の下でした。彼が家を修理する時たくさんの遺骨が出てきました。

鞠家



重慶市街図

日本國陸地測量部 參謀本部

昭和七年十月調製

(局部)

